ポルトガル語劇団 10 周年記念

Helena Toida

2003 年に発足したポルトガル語学科直属のサークル、ポルトガル語劇団（*Grupo de Teatro Brasil*）は、今年で 10 年目を迎えます。いつの間に 10 年も経っていたのだろう…時はその歩みを速めながら、気づかぬうちに過ぎ去っていくものだと、改めて実感した次第です。当時の学科長、今は亡きミラ先生から顧問をまかされた時、現在の姿になろうとは想像もしていませんでしたが。

毎年 11 月の「ソフィア祭」において、普通の教室を借り、小規模な発表に向けた舞台づくりに励む 1 年というパターンが 2009 年まで続きました。そして 2010 年、幸運な出会いがもたらした、イスパニア語、ロシア語と共に 10 号館講堂で「外国語劇祭」として、初めて字幕付きの大規模な舞台構成を発表するにいたったのです。

2013 年 1 月末、ポルトガル語劇団同窓会と称して、新旧メンバーの参加で小さなパーティーを開きました。初めての同窓会で、かなりの人数になりました。私自身あまり深く考えていなかったのですが、10 周年をお祝いしようという学生たちの意図もあったのです！歴代の部長から「おめでとう」といわれるたびに、改めて学生達と歩んできた 10 年という年月を実感しました。

私はこれまでに撮影した作品全てを DVD にして、会場に持っていき少しずつ皆と観賞しました。それぞれの作品がとても懐かしく、当時の悩みや葛藤、成功したときの喜び一全ての思い出がシーンごとに浮かんできて、改めて学生たちの惜しまない努力と懸命さを再確認した次第です。今日の語劇が在るのは、やはりこの 10 年間走り続けてきた成果だといえるのではないでしょうか。

作品ごとに少し振り返ってみたいと思います。2003 年から 2005 年までは、テーマは誰でも知っているディズニー作品をと決めていました。すべてポルトガル語で発表するので、言葉を解さない観客は内容が理解できないからです。ただし、必ずブラジルの文化的側面を盛り込むことが大前提でした。これもミラ先生が提案したことです。ブラジル人の心理学的なアプローチや、家父長制度の意味について調べたりもしました。そのようなわけで、いずれもオリジナルとは少し違うウィットに富んだ箇所があるのです。

2003年　Cinderela 「シンデレラ」

普通の教室を舞台のように見せるには、まず暗幕が必要です。あまりお金をかけないため、布を買って私が縫い合わせて作りました。学生たちはまたそれぞれ衣装、化粧、小道具に工夫を凝らしました。取るに足らぬ些細なところに、学生たちの努力が見られる作品でした。鼠のカップルに助けられながら、したたかに生きるシンデレラは、ディズニーのそれとは、ほんの少し違ったものになりました。

2004年　A Sereia 「人魚姫」

ラストで人魚姫は泡になって消えません。女性が目標のためにどれだけ強くな

れるかを追求し、最後は王子と結婚し、めでたしめでたしとなるのです。手作りの海底風景など、少しずつ小道具に凝りだしたのもこのころからでしょうか。

2005年　O mágico de Oz 「オズの魔法使い」

ストーリーは変わらないのですが、魔女はなぜかサンバを聴くと苦しみだすのです。だから武器はサンバを踊ること。ミラ先生にサンバのステップを習い、ラストは大団円です。ドロシーと仲間に渡される魔法の小箱をどのように作ればインパクト(例えば、開けると光るとか…)があるのか、と長い時間をかけて取り組んだりしました。結局普通の小箱になってしまったのですが。

2006年　O vendedor de fósforos「マッチ売りの少年」

思い出深い、初めてのオリジナル脚本で臨んだ舞台です。ブラジルのストリートチルドレンをテーマに、ファヴェーラで起こる様々な問題を取り上げながら、たくましく生きていく少年たちを描きました。この年、トイダが研究休暇でブラジルにいたのですが、部長をはじめ、皆で力を合わせて乗り切った作品です。ブラジルに送ってくれたＤＶＤを観た時は本当に感動しました。まさに登場人物さながら、学生達はたくましく頑張っているからでした。

2007年　O Monte Katikati「かちかち山」

日本の昔話をブラジル風にアレンジし、コメディタッチにしようというアイデアからできた作品です。ブラジルのとある農村に住む怠け者のおじいさんに手を焼くおばあさん一働いても暮らしは楽にならないなら、働かない方がいい、というおじいさん。タヌキと互角に戦うおばあさんは、女性の強さを代弁しています。そして筋書き通り、仇を取るのが兎の親子—タヌキをだましておびきよせ、といった展開です。戦いやタヌキがしっぽに火をつけられるシーンでは観客の大笑いで元気をもらいながらの演技でした。

2008年　Saudades da terra… Que terra?「移民の詩」

ブラジルへの日本人移住 100 周年の記念すべき作品です。ブラジルへ移住したが、太平洋戦争勃発で、日本が勝ったと信じる勝ち組と、負けたと認める負け組の間で揺れるカップルを軸に展開した作品です。個人的に感慨深い作品です。その根底にあるのは、人間の葛藤、愚かさ、弱さの表現であり、しかし、立ち直れるのもまた人間だと教えてくれるのです。引き揚げ船に使ったのが、私の両親がブラジルに移住したとき実際に乗船した船の名前でした。

2009年　Um planeta e dois mundos 「ひとつの地球(ほし)とふたつの世界」

ブラジルの民話をベースに、自然を守る森の妖精たちとそれを破壊しようとする人間たちのぶつかり合いを描いた作品です。衣装や小道具も念入りに作りましたが、森と都会のシーンを分けるため、布に絵を描いて背景を作ったり、いくつもの小さな工夫をさらに重ねるようになりました。

2010年　Os Brotos 「若芽の季節」

記念すべき初の 10 号館講堂での公演です。ブラジルのとあるファヴェーラに

住む、ギターの上手な少年とお金持ちで歌が大好きな少女が出会います。すくすくと伸びる若芽のように、歌で皆を幸せにするという夢を実現するために二人は歩き出します。パワーポイントを使った字幕、効果音、音楽、ダンス—全てが初めての体験でした。そしてその最たるものは、小劇場の協力で実現した照明の使用でした。色とりどりの光が点滅する中で展開するダンスシーンでは、観客も踊り出しかねない熱気につつまれました。学生たちの笑い顔が印象的でした。

2011年　Memorial de uma casa 「家の記憶」

コーヒー農園を営むある家族の三代にわたる葛藤と決断のお話です。初めてのファンタジーものです。時代が交錯し、主人公は昔の「家」の妖精に導かれて過子へと旅するのです。そこで彼が見たものは、若き日の祖父や父の姿でした。そこで色々なことに気づかされ、成長していく姿を描いたものです。字幕や背景が洗練され、イルミネーションやスポットライトの使い方が一段と上手になった作品です。

2012年　Seja do jeitinho como você é 「ありのままの君でいて」

日系ブラジル人のアイデンティティ・クライシスがテーマです。「僕って何？」と悩む主人公に、少女は言います。「冥王星は自分が惑星かそうじゃないかなんてちっとも気にしていないの。冥王星って名前があることすら知らないわ。でも宇宙のどこかにちゃんと在る。私たちもそうじゃないかしら？」この言葉で主人公は救われます。耳をすまし、目を凝らして周りを見れば、地上の冥王星はそこにいるはずです。とても強く真摯なメッセージがいくつも発信された作品でした。ここでは照明器具をメンバー自身が設置できるようにまでなりました。

2006 年以降はすべて担当学生が書くオリジナル台本で公演を行ってきました。主役級を務めるのは 1 年生です。まだポルトガル語学習の日が浅いのに、なぜ 1 年生にやらせるのでしょうか。それは、語学の向上、ネイティブによる徹底した発音指導、各自の秘めたる可能性の発掘、特にそれまでの自分と違う役を演じることにより、未知の自分を見出していくことなどが主な理由です。私は常々、語学学習は体得、つまり体の感覚で覚えるものだと考えておりますが、演劇はまさにそれに適しているのではないでしょうか。2 年生は幹部を勤め、3.4 年生は舞台を支える裏方に回りますが、見事な連係プレーで、本公演が近づくにつれ、一丸となるさまが分かります。顧問の醍醐味といいましょうか、そんな学生たちをそばで見ていることが、また素晴らしい体験として私の中に蓄積していくのです。特に、現実の自分と違う役を演じることによって、新たな側面を発掘し、成長していく様をそばで見られることは本当に幸せなことなのです。

ポルトガル語劇団に参加してくれた学生たちに改めてお礼を言いたいと思います。あなたたちのおかげで、トイダはいつも言葉にできない感動を味わい、それを次なるステップの糧にしているのです。Muito obrigada!!!